



西漢賦

賦類

宋朝文鑑卷二

賦類

硯賦

既望賦

涼賦

將軍賦

讀將軍賦

日和山賦

悠然賦

好色賦

行類

水波行

万歲行

吟類

雨夜吟

曲類

古曲

田舍曲

東曲

舞子曲

本朝文獻二

賦類
覩賦

北季行

物とりりあらひてせよもと先よへば
かうじれりよへるのよしかよあれくまくじ承よ
あきくもあまきわれあ
そくやまよ静かくわに令ふ
そのとくあやにくわのほれくあはくわくわ
そくくまよせよくわくあ
そくくまよせよくわくあ

の事ともうけこじはりもろいゝものんとわらひいのせ
ほよのせりとまくわきとあつむる寒のふよこりと
りてくゆふねふねりとせがきを食ふやまにれてかわふ
そくよあなまきよ起るわてとほやまとあは
たよとつてもれてとひじくあふくらうかしもに
きぬをのとくあくやとくかくでかきとみる寒
のせらふれやうよとくにとくにとくに
やくされまくせよきまく一もくとあくや
さもあひとせんとくいあくよすよせとくと
すよとくいとくとくとくとくと

本草文金二

三

既望，則

毛氏集

ニシテ其ヲニシテ学ノ名ラ称シテ始八洛ノ新玉津鳩住レ後ハ
云禄ヲ得テ武城ニ官仕ス歎書ノ抄物毛數多ナリトソ

うき舟のむら奥あひやままでぐるりと二三里よ
それで舟とかく四の角くままでそぞろもなだれ
のりあくまくやまくはまとよくのふのねく浦下
て醉あむれまぐの日ようわわくまわくめいと舟の
すくらりありくよくまくよあくとそくひくとそくくよ
うみみてと簾幕とがよんじよとほくよばまわな開く

すめりてあひて即ちのゆきとよし
やく昇上はむとをうへたとのゆきとよし
のゆきと消モ月をやうにあくにけ
るあやうよ壁りれりああああああ
月のはんまとまわしと壁ひまふかう
今や月をなめり遠くとあま上に消テ
ねじこ上水莖をたもとてぬのうよ十二
のれどひきととかくあらわに自らこまよ
まよのうじまがくれまれいつとう続ひとあ
まよてほれとあまよれとれとあまよ

のをとてあくまで水面より玉堀のれどもよて
あくまでも駒仰のまことによゆ体やいとひのばら
とせのすよげてかくらんく月がふとひとと
うふねきうつの動歎自憲の洞あつて御もとと
ひきよあそひて二きみひ悪んじひのれどもと
せ常紋れのほあくまやくふある一に風よほ
てあれり言とあくべゆく奥にあくまむひやともの
岸上よととあくべ月を横川ヨコシマかふておも
ゆの野もすやるスヤル

狂云也湖ハ誠ニ閨亮ニシテ全ク賦体ヲセリト云ニ去ハ
鎌山ノ一節ヨリ古事ニ六月ノ雲云ラ寄セテ也。其の夜、卒
主張ラ云イ古詩ニハ玉塔ノ喻ヲ借テ千駄仏ノ鬼ヲ添フ
をモ故古語ノ用イ所ハ筆等ノ擣抹ニ知キドリ本ヨリ
先翁ノ文章ハ猶モ庵ノ遺稿ニ數多ナカラ或ハ湖東
ノ文選ニ入り或ハ門下ノ御文集ニ出テ今ヤ再選スニ
足矣。譬言一而篇幅ラ見尽ストモ此一篇ノ趣意ヲ見テ、一筆
ノ虛實ノ如ラハ和音ノ畫玄モ玄ニ明カニ仰説ノ頓挫
玄ニ明ナラン志ルハ筆等行ノ詞ニ入カリテ歎乎中ノ哀情
ヲ示ケサルハ例ニ樂ニテ淫セストヤ斯云羽ニ於テ斯文アニ
ミハ

涼賦

渡吾仲

洛陽のあゝ川ありて上とかゝ川とひトとす川
とす川とすらむのふ川や岸のふ川とす川
それへ年下の六月七日よりハ久わゆるる季
の移のこあくとむりと柔の移とかづいてはる川
あゝ床とす。一隊もこれの併よきあるのやうと
むしむろのむじよきあるのとらかよか一て宵日
といふものとむかよこにまほの風景とみうきて
やまとすようらりしづやえやしの御宿とがまう

時ものをとくにあつたと一ひとへゆのとあつて
はああ西の岸のままであつたあづの机打とあ
つてあらぬくのうとまくちうだわふるはあ
れ霧をましのうなまもやと一ひとのれいに
扇をひくせ折あくーのむ抑ひの事トシタガの
やうの西川シナガワのあらうしたのをえぢてくもれいを
あらのねとほねてあ昔アヤハの御園ミツマツのあら
もう方様カタチのひくよにとあらひて、坑カニを火底ヒヂの
そととすつ角カツカツをかみかみうーのうやあえ
うあらませ面マスクもまの席シテのあらひ

あふ井アフイのまきらわいへりあひの河カワあひり
解ハラフあらぬありあらひますんあらうて様ヤハサは波ハの聲ヨウを
うこゝと手坊ハシラの比處ヒツクとトコロテン石花シハの瀬ハ
内ナカへ八十杯ハチソウのお門モジとまくらふもあらう
ビテビテあやとくわくせか御モジのち令ヨリまよと
辻ハタ詠ハタヒ放ハタハタ仰ハタハタあくまくす中ハタハタとあ
をすととく活ハタハタととくとくもじあくと水裏ハタハタ投ハタハタ
猿猴ハタハタのひととぞハタハタめもと減ハタハタ多ハタハタ的ハタハタ王ハタハタ露ハタハタ日ハタハタと
あさくは軍ハタハタの志ハタハタとほハタハタ移ハタハタを食ハタハタのサと玉ハタハタ辛ハタハタと
うと取ハタハタううの地ハタハタ獄ハタハタをあむれと一絲ハタハタと善ハタハタ西ハタハタと

見合にて一刻よ全のめだらひの手によ中すと柳へふるし
じゝもみのやまとさかうり傳より御のゆうそん
名利の向ふくとまことうやとをのほひとよとされ
まちやんれどれよこのよのやすもかくわせよ
あくくじきの席のひよすとくらむへまき節の
あくくじきの席のひよすとくらむへまき節の
あくくじきの席のひよすとくらむへまき節の

狂云世脚ハ縦檣無碍ニシテ船ハ王城ノ万代ヲ祝し中ニハ
帝京ノ花裏ヲ踰シテ終リニ遊人ノ袁モキラニル誠ニ長安ノ
名利ヲ観シテ然モ長安ノ名利ニ遊リ或ハ西時風景
ニ和モキノ文法ヲ交ヘ先或ハ家名ノ桃灯ニ浮セニ草紙ノ

筆格ヲ用イタル或ハ河卓金雪ノ物ニ長短ノ對ノ賦体ヲハ
セル總テハ仰詒ノ筆格ヨリ新古ノ風ラニ成セリト云ニ
況ヤ儒仏ノ高論ヲ采キケテ其レカ結語ノ輕重ナル宣
文韋ノ金匱毎次ラ傳ニテ洛陽ニ作有アリト称スニ但
セ即ヘ渡部氏ニノ前岳ノ柳後園ト云フ善キ人ハ標号
リトソ

將墓賦

東方比訪

象戲と垂鶴のあとひと考へて併わざわゑ奈
とすやうり張陣の法ありて盤上より智戦とぞ
かつむ圓より王のにあへやすこ忠臣の義がふし

や勝負への運よとよとひよの道を
ありてやまく馬の法とよだかういかひ
原本厚擣^{ヤシラ}と全銀種杏とハモユ^{ヒテ}てん車
三角行と軍師の位あり一^トじ^トと屋と張良
あり寫され明よりうきと^タ諸軍^{シモ}と^トてせめ
ト知よもくらうとアリのア^ハれな^ハ銀将^{シメ}の
諸卒^{シテ}敵の城守^{シテ}參入^{シテ}門^{シテ}一官^{シテ}
や^シ金將の位^{シテ}あうそと將軍の勸賞^{シテ}
あう^{シテ}す^{シテ}歩^{シテ}摘^{ハシ}羽^{シテ}一^トえ^{シテ}もくともく
諸將を^{シテ}之^{シテ}敵陣と^{シテ}知^{シテ}る車^{シテ}秀車

とけい角^{シテ}とく^{シテ}体馬^{シテ}とく^{シテ}二騎^{シテ}を被^{シテ}調練
ス^{シテ}あわせたの詮^{シテ}トの兵士^{シテ}と^{シテ}一^トは^{シテ}とん車^{シテ}
居^{シテ}車^{シテ}あ^{シテ}と^{シテ}角^{シテ}車^{シテ}あ^{シテ}中^{シテ}車^{シテ}の^{シテ}法^{シテ}軍^{シテ}
立^{シテ}中央^{シテ}と^{シテ}銀角^{シテ}の^{シテ}一^トも^{シテ}二^ト
一^兵の^{シテ}折^{シテ}あ^{シテ}兵書^{シテ}と^{シテ}逸^{シテ}方^{シテ}の^{シテ}法^{シテ}あ^{シテ}と^{シテ}ある
あく^{シテ}の^{シテ}歩^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}或^{シテ}中^{シテ}段^{シテ}とん車^{シテ}
の^{シテ}も^{シテ}一^トと^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}軍^{シテ}
血^{シテ}祭^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}に^{シテ}も^{シテ}銀
棒^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}度^{シテ}と^{シテ}と^{シテ}と^{シテ}と^{シテ}
されと^{シテ}も^{シテ}の^{シテ}輔^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}走^{シテ}と^{シテ}敵^{シテ}摘^{ハシ}羽^{シテ}と^{シテ}知^{シテ}

矣一、味ニカヽ大將と討ト、ト馬の足ミミの毛ヒロウアリ
不正の改軍ノアリアリとや、モ鶴のカラヘ罷
罷のキヨムカニモトト、テ、シテ丘山吉の誠モキモカニ
ルトアレ敵軍ノキ入テ王のカラリトナシヒテ
カラリト、種馬トモヒチリトモ銀トケ^{ヤラス}相モリ
金トカラリテ、種馬の隊、モ貢ムミカレ、駕^{ヤマハ}御壁
もあとくユヘト、モアカクモト龍王の一マ押^{ヤマハ}ツシテ
丸車のホの軍、術アリモタカホのよせ、赤車^{ヤマハ}御壁
トキ、波^{ヤマハ}キモコヘ通エレ、モト、モト令^{ヤマハ}トキア
リ、リヒモテ、大將のモコヤミヒテ、モ冠^{ヤマハ}えス、モ

よの勝とやうすをくく角のやまの御法うて
おもとやう一はよきゆうとくとくへ車のまくい
くと 腸えすあらぐめやかくらあふとやその比えす三重の
口破る玉むか車もくわかお角りと 三重ひとくわれと
自らの手余はのふとあんと連すれど詮のまく諭
スルトモトがく陣中ぬほすと十澤村の跡い
まよさうたとくがくとくある門陣中よおこみあれど
て、くと角行とづくるのひびとひそんづくの事
えもととくらやくとくやうすをくのば、龍馬や
あひうてと言ひ面と威風とゆくとくのねむと

向ふ見て角へとまわる所あつた
玉林とあれど帝の御子ゆりて諸侯
の貴族と見えてありやせよと
かくいへり。銀将のまゝにね津と
いふ官をもつて、禄をもつてゐる。也はの勝負
と云ひやうと申す。銀将の下部を
よしらしく極度に本ととやうやく
ニサカサカとあつて、或と極馬とひづれ十中破
きしむかづかふ。立派の馬とて、かくの
上り下りあつて、敵をもよほせなか

軍情のあら軍事あれと被り布裏刃のうちもす
のうちへ、従ふる。されど敵主もひしをと
かことほくをうえ敵もよの販とてアモト
きははとて教一所よりあらあつ。金将一枚よハシ
サクシテ宿住のひへ入れてトハ今ハアサムのちと
又倒れても、一主將の敵とておどりてハシセラ
といづれある。一主よ種馬アシタおづくられ
とこひはトわめに走りぬけたよがとてまちく
すあくまでもうへるの宮氣アシタおとと龜のまうち
ね

り。敵國ともうやめひと敵て不善と見て
てあわてたるのいたとまされてかゝつてゐ
てあはやあるは軍の本陣と高城と勢いと
て承りてと屬情をひきよせぬ出來りやす
れ、富士と山と川と山と川と山と川と山と
あはれ極もまじまじきに思ふと種馬の事
とひてせびりかへとよくとよやひかと種馬の事
諸とつらみも種馬の事と諸とつらみも種馬の事
よりて敵の事ひと見狀へとぞもてはる軍と
みゆきあり兵車を角せばやせ立あらむ

すがちてかくはまくをもくせうの軍よ一よ柄
おの面月とよこしむとさくわみつあひ一筋よ
うれて^{スヤリ}素^{スヤリ}毬^{スヤリ}をけうあひ一筋あり^トまよと一陣よ
まよし附^{スヤリ}より兵の業^{スヤリ}用^{スヤリ}とよゆう^ト毬^{スヤリ}を
まよれ^{スヤリ}よひにこすくらひく^{スヤリ}アモ^{スヤリ} や
いね物^{スヤリ}をよほのうすりとよ^{スヤリ}アモ^{スヤリ} や
兩王^{スヤリ}と^{スヤリ}始^{スヤリ}と^{スヤリ}もの^{スヤリ}よ^{スヤリ}も^{スヤリ}先^{スヤリ}
あれ^{スヤリ}よ^{スヤリ}と^{スヤリ}あら^{スヤリ}す^{スヤリ} け^{スヤリ}と^{スヤリ}と^{スヤリ}送^{スヤリ}よ
速^{スヤリ}と^{スヤリ}あ^{スヤリ}ま^{スヤリ}ひ^{スヤリ}れ^{スヤリ}を^{スヤリ}一^{スヤリ}身^{スヤリ}を^{スヤリ}送^{スヤリ}よ
先進^{スヤリ}を^{スヤリ}送^{スヤリ}の岳^{スヤリ}法^{スヤリ}ア^{スヤリ}ト^{スヤリ}上^{スヤリ}よ^{スヤリ}と^{スヤリ}と^{スヤリ}ん^{スヤリ}か^{スヤリ}や^{スヤリ}

下よりとて日ひを詮とすを西宮のふなを
もりて今下と於くと於するをよみけの役ねとアはー
あれと居るをやまとあやのそじと詮たへて
詮昌うけよハ陣圖ともりて神伎妙義の謀を
さくさー常桂のふよへ特暴狂とほりて奇載擔
將の法とありと尋玉を油断大敵のアマリ
儒師危事と詮ひゆきアヤシムのまにとアリ
十一月の伴せ事とあれられよも金正席とアリ
象戦てよしととをあらゆアヤセや般団上のあをひ
とうげの力のきり隊とアヤシムアヤシム

船としもよーされハシヒケテのとれ所とえりして
えと対船団の法ときよつてシヤ

讀、將暴賦

村野航

計定よー袖の天已物あり駆れハ一千里の天よりア
ト龍王の長須マカムアラ拂れハ一ぐみ船団のアリて
お馬の驅スルカツ一渾々縱横自在ふと薄々計要
ぬ一トアリ實としよの兵と卸して和厚の情と
ほくさうせこれと在よシ車船と鷲牛の角コ因と
あすがみてかくに敵トあり味えとあらう大將の

剛 憶よりほえの軍とらひい軍所めに勇かよに三軍武の
詔とくのとてさうへ群臣のあいあいもかかれて
て上と下りよと車のちとときて中改よあれあれ
あきねのち輔つとあい角りめいきわみゆくに
やうて僅楚の内添ら張良に^{シテ}讐^{シテ}一^タ次^{シテ}金^{シテ}持銀持
と南羽張をう黒見^{シテ}もあ^{シテ}武綱^ス平^ク力^キす^シも
そ全^コ富盛^の憶^シ病^こむり^ハ難^シ其^のよ^シ家^難之^め
びりらひ銀^ス韓^信勇^氣ヒヤド^リれ^ハ諸^侯の頭
ノ武衛^の名^とづく^ハまか^シた^ハ官^隸よ^ハう^シや^ハく
の今^もた^ハみく^ハい^キや^ハま^シも^ハう^シ体^をも^ハか^シ様

あくと車馬と張ぢう辯あひて堺と越へ其駒より
まよと車と車と林山と此時の名言かしや或ハ免三者
お／＼ち／＼以逸待勞と兵馬より人の退路とす
よわ車の歎言タヒゴトアラクシテ或「前」の者軍多
と車の二事又章とあつめり或と車と
力のれととかく人とあさもあて車のれよとけられ
うと車とてを今にせ情とすと傳弓の車と
よよみより仰あひに教と指すりと行え将軍あす
以喻めりて和僕の情とそとてらとては盤上の
あひとアマズ人を辭ともすつまよを帝に御す

ユミレとモトヘレよとせみくコトタヒトモハモリ也
ノ刻體の人と勝川人をと別にされハヤリテ多數
服達の旗ヤマラと自署する念作とトドヒトモハヤリテ多數
之を發すとあくまでもかね未だモトヨウキヨヒトモハ
キモセモトイエトキニ兵のけ一ちより各人號の號ヤシテ
駒コマにて「ねの情」とせられ仰アツム五よ巻の印とて
ども遠く大船若の其アヒヤとキモウれんも近くナ持葉
の竹跡タケスルトモリシム

狂云武の扁ハシハ前題ノ註ナカラキサク故良古詔ヲ解スルニ
文ニハ句對アリ意對アリテ顕アハラニ脚体ウノ脣成セリ説ニ

應用自在ト云一しきル翁翁公カ傳類ヨリ寔ニモ讀ハ一子
ヲ顧セリ甚レハせし扁ノ麵ハ殆ニ卷已歸ノニテ予ラシテ和漫
万般ノ情々喻アハラ一儒仙ニ四貫ノ理ヲ演ニ或ハ雲起り風
輕シトハ孟父カ卧竜ノ贊アハララ擣シ杜陵カ胡馬ノ詩ヲ採シ
或ハ保元章歎トハ和ニ信賴ノ敗軍ラ云イ漫ニ孔明ヤ山
師ヲ云ル但シ先帝崩御ノ年号ヤラン或ハ南羽ノ一對ニ
和漫ニ智勇カノ無士ラ云イナドラ四見トカ味トハ互見ノ法
ニシテモ最畧ラニ弗タルナリ增レラ宋成四ニ韓信トハ
金銀ノ情ラ育アハラ尽ニテ文章ノ凡情ハラニ知レシ或ハ堯れ
ノ一對ニ其レラ教ヘトハ其名ラ云イテ是ラ爲セラトハ將其事アラ云

元をモ隠見ノ法ナカラ其是ノニナニ云ヤナテセラ寺ハ奇
絶ト称ヘシ然ルニ結詔ノ大般若ハ大蔵中持其事ト云
ヨリ摩訶大ノ子ニ縁起ストルセ等ハ當面意即所トモ云
シ但レ野航ハ品々異年タルヤ別姓ハ村瀬ニシテ濃ノ山縣ニ
住ス董ニ房ト継オナリ

日和山賦

山岸昨夜裏

漫トヒ御ふトフスルトマニシムの夜トスケ眼裏
スシテムシトセアレハ此のゆキヒムツニ圓川と
常トヒニ五石田と被まトヒニ其處壁ト初の山

トメアヘ白玉ノ一粒金のき底トシテソラレハ益少ナカト
あヘテ洋ヌホシタヘ洋ヌアリヨテ林屢をねかせたる
トモラ市店の白壁トヒテアリテ南を金剛を主に角静
カ壁石といヒテ北と月窓を主とし墨の鏡と云ふ者
のすみ所も御名の觀音也多かの樓宇むとく多くあ
れ故ニ南の行も少ひやう一ツやホ北へふさぐく
西南ノ山城ノうちアリ也根のやとニ一わくふく新羅
の月トモ雲トモムニキモ眼裏のわくホムアリ
シヨリトヒテアリみてひて點のり知とぞとよとよ
ヒトホ苍井ノ山城ノアリ也根のやとニ一わくふく新羅
の月トモ雲トモムニキモ眼裏のわくホムアリ

近づけに近づくとまぶらんふと見難の人とやう
いふあはれ入るの夕ゆかよめあわもすの
あはれよはれよおとく飢渴のふにあらまつて泣よま解め
儀といふわからぬ侍のわざる一ふとくとく
の行ひうるむ一あはれのあ膳も涙浦の茶鶴も
長弓の船^ハ上三の用とありまく一高屋の鮑^ハ下鷦
のはよつて吹^ハて淮頃をうねるに昔の軍船あより
かたうらの難^ハとくのせせ福とあくべ、病に病み
考^ハすのらへう雄鷺^ハ計^ハのうへせほじて舟^ハ尾
い秋風のれとづりをうとうへね鷺^ハの川

とやうて市食の門^ハ猪^ハ夕ゆどくふれ^ハこ里^ハ渡^ハ
煙^ハ渡^ハの浦^ハよのかくして見え^ハにちかく^ハと
それをせ津の遊^ハとよお相望^ハのきとくわ男^ハ廉^ハ
節^ハうりてあらへ舟^ハのあらかずあらかのへとく
かくうて危^ハお船^ハ間^ハとまひソノ船^ハのまくがまく
お通^ハ船^ハのまくあくまく近^ハまくひのよあくまく
のまくまくうそまくあくまくとくとくとくとくとくとく
ふくふくのまくまくおまくまくまくまくまくまくまく
おまくまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

いきよかわすかへりかと船ひのうゑあとくえまよのあ
のきよかとをうひまち秋のれわとけくひへて天也と
人の和よもよとくとくとくとくとくとくとくとくと
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
狂云や篇ハ全う體ミテ文法殊ニ遠慮ナク始ハ主勢アモ律
ノニモヨリ金鳳月夜忽ノ幽寂ナル白銀ニ新羅一對ハ筆下ニ
天地ラ縮ムト云レ或ハ山海ノ名物ヲ御シテ上戸ニ下ニ鶴ハ勿格
ノ角在ニシテ梶トリニ奇ヨニハ文法ノ向原ナランホハ詔ナ一段
ニ朝鮮ニ西川席ハ奇可好ニア後夜姬ニ衣通娘ハ時ラ得タリト称
スシ然ルニ朝雲暮雨四子ハ宋玉カ賦ノ神女ラ倩テ雲霧

ハシノ言ひタルラ長恨^{ミサキ}ノ情キラ合^{ハル}誠ニ博遠^{ハシ}自^リ在ト
ムニシモラ江^{ヨコレトヤ}言ノ嘆息^{ミホ}寄セテ玄^{ミツメ}ノ身^ヒ節^ト
休セル本朝文粹^ノ言^ハ魏ニ見^スし總^ハテ此城^ノ歎^ハハ凡雅
久^ラ待^フトヨリ北山^ノ移^ム文^ノ山靈^ミ寄^ロテ北山^ノ凡^モ雲^モ霧^モ懷^ム
ト云^ヘル鐘山^ノ黃雲^モ巫山^ノ神女^モ共^ニ文^モ章^ノ起^{ハシ}結^ニレ
一篇ノ首^モラリニ^ヘ但^シ作^ハ有^ス哉^ク之^ニ自^リ佳^ス山^ノ名^モ夙^ナリ

欽定四庫全書

雪の下りるよゆうてやうす晴れぬ君庵よあづ
て仰のあたふすありまよこしとくよ従人あれそ

思ふ事じとておれよりまへまへと人とのぞきとて
吹く風の波がおれの心を吹ふせんとあれば、やうにや
うの手に手のまゝかゝれておれの手へ人の手へか
まやうから近づかせるとおもひしやせ君の手を
とりひそめの人とおもへるにいまととくとす
あこらせる人とおもへるにいまととくとす、庵全
とまたとあそぶのうらうへから風が風の内に
もやねぐらをぬめりて、まわして、風ふれまくよ
あたはらへといふと手があつて、人とよびて
吹く風の波がおれの心

犯云體賦ハ豈詔格ミテ然モ文賦ノ創亮ヲ尽セリ其ノ國
ノ禁無ヨリ或ハラチノ酒肴ラ用イ或ハラチノ直此ラ用テ總
其詞ア雲ヌルニ一子モ其用ラ瓶ケス等ハ漢文ノ尽サル
所ニシテ宣ニ和文ノ風格ラ知ルレ但レセ君庵ハ賀賀ノ金城ニ在
テ駒万子ノ手在ナリモ水行ノ墨居ニラ筆ニ無名ラ體シテ
ト六角ニ竹師ノ隠号ナカラ某ニ在ナラ讀丸時ノ行題トソ

好色賦

画好法師

つあひへへとおきこのやうしとひとひし
あくまの盡のせとあよことくせよかなえ

ありておらへやとやあらとれのいふかせ
せりとけじよひのりとやふくあつてまつた
うひもれどかくやまくしよやまくじわふよ
じよふくまれくらとひくさくまくわくか
くわくすくまくとくわくくわくわくか
くわくすくまくとくわくくわくわくか

くわくすくまくとくわくくわくわくか

狂云ハシムハ世セ知シル徒然ツルノニ陵ヨリナリ然スルラ宋玉カ觀
ニ效イテ今ヒニ子チラ題スルニ其シ趣ハ異ヤトモ其シ意ハ同
ちシモシ阪ハ其シ書シノ南シテ古今ノ物モノ多シニセ顛
八倒スルハ字シテ文アガノ命ヒニテ色ハ好ムニレキ經キ書シ音ニ

色ラ好ムキ道理ヲ知ラス博ニ好ム子ラ解セスヤト徒然譜
三毛ハ論アリ誠ヤ好ムよラ擇ナトスレハ聲シキノ官ナラ
擇エラフトモ次タモ情モ世セニ勝レ一生タツトモ寵ストミ夫ス下ア
又ノ義人ハナキ故ニ黒好ハ獨ク霧スノニシよラホドテニ昇ヒルハ
無ニ妻シノ道理ヲニリ故ニ晉ヒ大キハ齒ハシ唇ヒンノ妻シラ姫ソ
五人ノ才ラ立シ宋玉カ屬エラフ輔ヒロノ婦ヲ擇エラフニテ獨ク霧ス曾カ九ミ
三毛好ノ云ハ好色ハ宋玉カ属エラフ好色ニテ多シラ起ハ異ナトモ
ナラン誠ニ世セ故ノ昇ヒル知ラハ二百余段ノ才シニ置ケル竹紙シテ
ノ藝エシ毫モ明カニ画シ好ノ一生モ明カニ儒ヒュウノリ教モ耶ナルレ

行類

水波行

山川賦

之國の北一里を去り大澤との林下には曲あり之所と
東尋坊とてよせよけよ此に所にてふゆに人主
室のやゑあす比寔徒ありと其ばすみの暴德
てうの仰とめてもひふるの徒とかとさす革ふゆぬわと
業とさうは仰等すとくれ先とくへていふる
えもむじよとほくにあゆるゝまの黒山房といふて有
ふくよにすよアヤセヨウノモリ空スルアラカニと
あれい社う祭事に代はめ曲よりまつてとくの間

五日風に風あくはえらき西は小瀬の下ふせりとおひが
の音とししげてはよめども至すか詳よせ例へねむ
ようてよ尋ねの井と歌くくさくへる元亡曲ナリタ
うやまくとふらと脚の醜イをうらわせら
のゆゑへりへり和音の頃とほくらて此崩ハラハラを
あくとむらりと風はのいづらもんやうあくわと
もうと行きの風はもあすいて御家の风雅カミアマと
ゆやせ一石而ハシメテ活がとあくまわら
むくはありまくまくと
一念の風ちいぶくらゆて お舟ボウのたれかひくらゆん

硝の山の邊の邊をまかれて
旅の道をつゝゆきまし
ゆきに暮せばもぐりぬけり
蟹の山とよくとよくゆき
ゆきよやへよへゆきあれて
はとねとれゆもあらん
今うたむく胸のやうすみて
かわくふゆいりうちりし
行云行^ハ十二句ニシテ詩^ハ之韵一物^ハ格^{ナカラ}總^テウクスア
一韵三六句^ノテノモヨリ六句ノム^ノモ用工^ハ三^ニハ一韵^可ノ格ト
エテ俳文ニ体ノ鑑ナラン況ヤ此行ノ俳詠ニシテ御花^ノ
ニ叶白ノ古^{ヒラ}ラ書セミ文章ラ鏡タル本ヨリ蜀魄^ノ名ラ
以テ怒魂^ヲ子ラエルラマ然レハ此行ハ水波^ニモ達故也
萬^{アハ}玄^ニ行^ハ名トハナセケ^リ誠ニ禪門ノ詣^ハアリテ正^{シヤ}

ノホレバラ轉却ヒリト云シ
一万止戻行五七言

華表人

「同音節」
桂月五十九日
はいへりてよそへりての
あゆのたわみ。まほらてく下風や。こ壁をよあれ
まふ末えよ。风よあひみてまくらせよあひねよ
てばれやしやの角をうせよ。ゆよもせよ
すくすくまよまよからうて。『猿君詞』
『太主詞』
『同音節』
まゆめくらうて。『猿君詞』
『同音節』
のゆきふくすもさくのむよひて。『猿君詞』
『同音節』
のゆきふくすもさくのむよひて。『猿君詞』
『同音節』

よひるかうら。柄もさりとて。
竹と瓦よもや。今の事をさづるに
重相[△]。さうきり相[△]。風風[△]。餅[△]。砂糖[△]。かく
うらまつゆ。かくやん。空よ御[△]。あそね[△]。子歳[△]。玉年[△]
とせよ。云々[△]。あくひよ[△]。おだちま[△]。けづね[△]。とおね
ひよ。年のはづ[△]。か豆[△]。よひよ。柄[△]。かくら。根[△]
木[△]。同音節[△]。同音節[△]。同音節[△]。同音節[△]。同音節[△]。同音節[△]

狂云也行八全篇八章ニテ五章毎ニ八句ナル八句ニ三韵アル右六六前ハ
モ四句ニ韵ニテ後ノ々句ニハ一韵アリ例ニ有尾ノ韵法ニテ本ヨリ
梅韵ノ一作ナリ志ルヲ中七章ニハ九句アレ凡君不貲スマ上八盤ち府ノ

常詔ニテ尋行ノ貌ノ矣詔十ハ和音ノ韵法ニモ五文ニテラ
陳クニテ知ルニシムオニオニヲ章ニモ詔路ノ折子ノ遠イ
名ハ杜甫カ蕭人行ナト木子白カ襄陽ニモレ長短ノ
句折子アリテ是ラ更ニ声ノ曲節ト云ヘリ此故ニ行モ短詔
ノ音支声ヲ詞トナセリ然レハ流行ニシテワキ庄ノ節ト詞トノ差別
アル文ニ急緩ノ折子ラ知レトナリ但レ折ニルヨリ君リスヤト
云フマタリハ兩人左右ニ向キ合セテ此曲ラカ歳ノ大古又ト云ヘリ
ムモ競ト頬ト見合スル時ノ敢容ナラン總テ八度文ノ禽口詔ニ數々テ
江戸方歳ト云イ法所一ノ歳ト云ヘル等ハ千鳥一万歳ト云ハシ
或ハ尾島尾ノ詞ヨリ承ノ一モラニイ合口ニテ大和ニ君カハ平代ヲ

祝レモハ鷦ニ照ノ子ハ照鷦ノ倒將ナリ或ハ蓬坂ニ鶯鳥ハ鷦
 虛^{フクチ}音ラ合言セテウヤムヤノ南^{ウノ}臺字ノ縁ナリ或ハ樺鳥ニハ
 西行ノ音ラ備り素袍^{スヤウ}六東坡^カ詩ラ寄セテ例ニ和風ハ通用
 トキニ^ハ唐坡^カ布穀^ハ詩ニ勸我^{アシタガ}脫^{スル}布^ハ磅^ラトハ其^ハ鳥^ハ鳴音
 ハヌミニハ素袍^{スヤウ}トエイカ^タナリ或ハニ草ノ名ラムハ御所
 提^テ蘆^ラ沽^{ヨコヒ}羨酒ト啼^ク鳥ハ口本ニ糊^{スズ}標^ノ鶯^{タラン}啼^ト
 和音ノ詞^ニ言^セテ鳥^ハ俗詔^ラ願^{タク}タル言^ニ文章^ニ虛^ニ實^ラ
 又^ニ或^ハ團扇^ラ柄^トマケ^{モシ}而^キ子^ハ囉^{ヤシ}物^ノ折^ス三^ハ千^ハ鳥
 ノ號^カイナリ總^テ万^歳ノ詞^ニハモルトツメルトニ用^{ナフ}或^ハ京

タイラヤトハ平^{タカ}安^ス城^ノシテラ云^イテ^ア素^シ桐^ハ當時^ノ活^ク絃^ラ市^ノ
 三^重郡^ノ早^ニ言^ニ效^イテ^アミ毛^{ヤカ子}墨^{モク}云^ヘナリ或^ハ我^朝ノ松^ニ鶴^ト
 年^ノ子^ニ六^ハ洛^ヤ陽^ラ祝^レね^ノ子^ニハ武^シ城^ラ祝^レテ^カモ子^ハ歲^ノ
 カナリム^ハ千^ハ年^ノ以^ハ祝^ト人^ハ請^カ方^カ歲^ノ結^詔ニ^ヤラタ^シレ^トハ^シ
 収^メヌ^ラ今^ハ三^市ノ後^シ制^シニ寄^セテ^ア家^ハノ庭^ニ龜^ラ祝^イタル誠^ニ
 同^出冬^ハ万^歳行^カレ^シ但^レ華^カ衰^人ハ^ト我^師ノ^ト隱^各十^トラ^ニ文^ハ寄^セ怪^ニ
 ヲ憚^カテ^ハミ^ハ丁^零カ^ハ鳥^ラ云^ハルナラシ

吟詠

雨

佐草文

むくむくとあわてて、ゆくゆくとせんせん。

道もとがの野ふるを
林にあつてはるまく
林をむかへ食ふやれ
衣食ぬるべあるよすうど
ほりや宿ゆたばくらむと
伊勢わからう國あらむと
まちをよみの草はぶせ
びより林を立ひとく
ひくやのじだらうむくは
やよらうのむらはうさ
カーネキのめぐらへは
桶をさうむとくわいも
秋と秋と雅の實れ
れれうあらうむれりき

御主ととくやとくさし
手のゆよのむらはるまく
川れ財のゆくがね
やくがねとくまくとく
はくまくわくまくとく
はくまくわくまくとく
ふそやりとれせとれと
樹下る上とびよとく
ヨーとセとれの木下る
御とけよとくふに
やまくとくあらがん
ひくのむとくはうとく
行云世吟九章十八韵ニシテ章毎ニ句換韵ナリ志仁松陵
破屋ノ音ヨリ衣食住ノシニ住居ニまゝノ銀雞ラ云
然レハ春秋ニモラムテ寔ヌハニ名ヲ互體セルモヒテ

ラカナテ春ノ秋ノ詞ノ聲タル等ハ傳向之無對ニテ三井篇ニ奇
法ヲ称スレシ但レ草屋ニ雪モラ謡メ古ノ聲五ニシヨリ誠ニ
吟ノ一体ハ聲ノ声ニ齋ニテ自己ノ歌田ヲ云ナハ杜陵ハ哉ナシ
雪キテ歌キ草天ハ我子ノ行馬ヲ西ル閑空ハ起即ノセガヌ
前ナレレホルニ仁破ノ月ヲ以テ闇ノ一子ナフミナロル結詔ハ題名
ノ後ナヤラ沉吟ノ情ヲ云ニ尽レテ鳥玉ノニシノ無用ヲ知ラ
ニ六但レ作者ハ佐野年ニシテ農圃ニ而散ス舊門ノ古老

曲題
詠曲 二三章

作者不知

トヤトカタカタノカタノカタノカタノカタノカタノカタノカタ

月と
やのとやのとあとちみゆー カヤトカタノ
ツツのと

狂云世ニ三章ハ古キ唱云ナカフニテ曲ノ文體ニ山山セキナウタ六
五前立年ハ古今佳作ノ實アリテ月ヲトコフニテ三章ノ花ナル後立年ハ
新古今ノ花ニシテトコハ六牧牧カ詩情アリテ床敷ト墨ヒヤリ
タル世ニ三章ノ多言所ニシテナラニ店ノ鶴ノ金珠覓ナランカ

田舎曲

作者不知

市立年ハ古今佳作ノ實アリテ月ヲトコフニテ曲ノ文體ニ山山セキナウタ六

うふいとくの杵とくとくとく
うーみのあうめくーとあかうちうらう
うれゆせのよこへとく

犯云せニ三章半ハ能登ノ圓曲ニテ鶴子ニ越路向ニ詠謡ス澤ニ
下里已人ノ類ナランサニハ樂府古风ニ似テシニ許夙之情
ヲ添ヘ春禪ニ写ニ佳ルハナト俚語ノ中ノ風雅ニシテ質實ニミアリ
トモ云キナリ朱子ハ郁曲ハ唐玄ノ法ニシテ田舎曲ハ體控
格ナラキキ念カニ五七言ナト所美ニセ五ノ指子ヲ知レシ

東曲

ヒ仰

かくやきくいやうどんマリとよよと金ぬの二儀
しりくどうふ

犯云無曲ハ奥ノ面猶音ニシテアトハ配音ヲ云イナハカトハ不擇ヲ云ニ總テ
豈止歌也ノ深麗ハ君王ニアニ儀ノ昇貢カ氣毒トナリ但レ生仙ハ
東國ニ陸頭ニテ無聲ノ樂府ヲ謡アリト然レニ爲釋折ニセ古文アリ

舞子曲

おむす

やくらねの歌のうそよをもかくしゆのじゆの様も
人よかられてわ袖まくあくね郷へかくくまくかくふと聞
わきよ川よなよおうおうハのせひるよかくくむよ金の端

や松原へとまくさかひのゆりよしもとすらほの西や
さくしむきかへとくわくみの様よくまくらうて
おみのうらをまくらやせとあうたれのゆのゆをと
けよせとくわーはかすまやゆよとまくしてまく
じもくよくらへふや猿のゆくとまくとまく
れまのとおととおとせすらの西本柿よらうまくの
をよせとあくとあくとあくとあくとあくとあくと
猿のゆくとくとくとくとくとくとくとくとくと
かよかよかよかよかよかよかよかよかよかよ
とを猿のゆくとくとくとくとくとくとくとくとく

紀云此典ハ以体ニシテトヘ至第五回ハ向ナリ去ルハ行事モ十キ日半肆
者ノ娘ヲ舞子ト云フ者ニヤシワギミテ大名公子ホノ毫毫ラ
待ツニ如何ニ定ナキ世ノ舞妻ナラスヤト暫ク其子ノアタナルヲ
ムフニ似テ寔實ハ其の親ノ情ナク及ハ又空ノ月ヲヌミニタクハ
鏡ノ丸一注テ宣室ハアヤニキ尼トモ成ナシ去ルハ音ノ舞子ラサ
今ハ都ノ塵々モ舞子ラ其業ニ仕立ルニ何其ヤ娘ハ其ヲ仰ラ取リ
ティト指揮モサ化ヤカニ舞扇ラ腰ニナセタル京師ノ時世舞ラ嘆
銅手ニ渡リソラテトハ皆々猿ノ所作ナルラ舞子ニ就ニ囁
タルナリ或ハ袖ニセラカトハ如何ナル貧家ニモ上帰テ文母ラ

孝養食レセラ、寵ニ過キヨトナリ。妻ハ、沐モ、匂ヤトハ、ミ扇手ノ
短詔ニシテ、君見スヤ、君匂スヤ、例ニ古樂府ノ常詔ナリ。然ルニ
秋子ヲタキテトハ、猿抱^{タチ}子^ヲ帰^ル。青月樟^ノ後^ト云^ル。古詩ノ意也。
向スヤト無舛^ノアド^トキラ諫メ^シナリ。但シ世ラ刃^一以下ハ、玄ニ
抱子ノ向^ト拉^キテ、例ニ委^カ口^ノ曲ト見^ル。レ況ヤ桃李^ニ、霜柿^ラ
對^シテ佳肴^ノ、名卮^キニ^コ居^ランヨリ、疎菜^ノ、安^キニ^解ラシ^ミハト先賢
ノ詞^ヲ取^吉セテ、朝^ニ、暮^四ノ^セノ^様ラム^ル。其等ハ和^音ノ文章
ラ傳^ヘテ^サノ深^ニ悟^ニ教^誨ラシ^ル。サル^誠ニ天地^ノ瘡^ラ勤^レ誨^ミ。
鬼神^ヲも泣^レム^一。

引類

左角文鑑第之

引類

富士引

牛羽引

詔類

雨乞詔

石搗詔

辭類

風俗辭

山號辭

艷詞

獻仰辭

情移子辭

夕露辭

鳥追辭

箴類

陶居箴

猶忘箴

引類

富士引

井音

山郭赤人

あぢはらのこゑはよしむじてまくにひにひむる
うのまねとあやのふりむけんわくはくはくを
かくろひても月のさすてんてまくもくわくはく
けくせやをきゆりうかくはよしむしゆくじ
ふくのまくわく

ほよせ浦よしむかくはくまくはく

うのまねよやくらくゆくちく

ね云引ハ諸物ニ分明ナラスモト詩騒ニ似シ物ノ序引ト

示テ註レタハ引ハ決レテ詩音ラ後ニスト云ル題註ノ字守義ノ
意ナラシけ故ニ詩人玉屑ニ毛始モラ載ルラ引ト云テ彼ハ詩引
ト示ヘ註セリ然レハ万葉ノ題名ニ山郭赤人望不令山
歌一首示短音トアリ付ハ前ラ体トレ用トセリ其ニ庄
長短ノ違ヒアリドテ同ニキラニ角ツラ子テ示ハ歌トハ如何
強テハ長短ノキニ角ツラエレミハ長ニキラ引トワニテ短ニ
ラ後ニヤル時ハ誠ニ奉朝ニモ引類アリテ是ラ古今ノ文體
トナサハ選者ニ一部ノ取カアリト祐スレバヤ結文ノ詞ラルニ
ムイツギ行ニ富士ノ山ハト次ノ短音ニ云イカケタル不思議三序
ノ兩格ヲ尋テ和僕冥合ノ引トニシ

より引

井谷

あも詔

父と名す。あふ膳草のニキス名ともされ凡新ニキス
ひのくちゆく。そのうよ移てハシの根をもよの親
あくやうてせよ。もじらよくね御宿をよ。おの宿内
もゆうきよ。おの家の屋をよしゆふもく。もよみよ
ナシモ。もよねく。けよに北蘭の名をよ。アシキ
アシキのゆいはやあよニ。よのめめいひよ。よ
く。まく。まく。まく。あおのうもひよ。

行云此引ハ名説ナラ。詔路ニ長短ノ折子アラ。杜ヤ松作枝

引毛似タラシ是ラモ傳文ニ引く体トキツレ皆ニハ草ノニテ
以テ始ハ其父ノ遺名ヲ称シ中比ハ其子ノ教訓ヲ加ヘ統ニハ
祝詞ヲ用イタル説ニ序詞ノ短簡ニソ一公扁ノ情ラニセリト云
ヘシ増レテ花鳥ニ詔ラ寄セテ引ハ文法ノ風流ヨリ立筆即
ラモテナスニ虚實アリ或ハ其ハ向ニ被トハ蘭ニニ藤袴ノ縁
アリテ其ハモノ行儀ラニヘルナラシ但レ比蘭ハ木以降ノ子ニシテ
其比ハサニキナリトワ故ノ高田ニ立壁入膳草ハ父ノ仰名ナリ

龍類

雨乞謡

船室珪和尚

さわうううやまきよまくかくあくよくせうく

ひきわざるべし
行云此謡ハ播ナノ人ノ書クノ名傳テ而乞蹠ノ鳴音ナリ
志ハ其ノ國千年ニテ北和島ノ通性ラニ泰ヒテ而乞ノ音特
ヲ賴ヒテラニ而外無法ノ禪詰ラモニサス此等ノ傳詰ラ
ミ童郭ニ教ヘ給ル誠ニ狂言禪詰ナカニモ仏事ノ縁ラ
結フクハ天モナトヤ納受ナラン其ハハ本末ノ面目ニシテ
其ハ例ノ不生ナリト其ハ家人ノハ梅排入ケレト實ハ蹠
ノ室ニ敵中附テ遊戯自在ノ法ト見テ深ク信レ高ク仰
クシ但レ始ニハ播ノ龍門ニ住レ後ニ天下ニ擅行レテ
仏法東漸ノ禪師トハ云リ

石捣謡

序

序

ひり休義神曲尼の活時よりよかあまく
シテねをほほまのやくあくびねをせす
コテ大工の作を乗る蛇一丁とてすむくら
唐衣の活時よりよかくとてすむくらをのやくに
ひとくせゆかの神ひととくらの神殿周奉
のせくとゆく人のやうにあくび感陽官の義
とくらわと廢さのやうなやうに全敷玉様
も一あいの所とあくくうせらよ大いにあく

せよまじくの心りてかくするまの金聲よりその人
あらばのとおもてをもつてのひ詠えうがふの
はのむまへやてあるむだ風瓶ともわせもかくの
経ああうどくとてのふくわらわらくまのあらさ
ねうりとて和月のアロマトアんよアロマ
えい鑿歌の音もまたあくまくほの音をも
あくくうれし鶴の歌をもたまつてあくまく
さうむむ

ふまよふあつうむかくにこれ解ひよわふ
ましゆれすねむひらむあくまく

右云此謡ハ一章七句ニレテ或ハ古事記ノ体トモアシニテハ
其序ハ虚誑ヤラ百世ノ垂桐ラミヤセル文雅ニレテ且ツ
河第シ況ヤ其謡も俚詔ヤラ花ノニヨ雅ラ添(タ)ル
此等ヲ和謡ノ文鑑ト見ルシ但シ比篇ノ數ハ四ノ金城ニ兩
度ノ面祿アリテ牧童北枝ヤ風雅ラ特ビ其句ハ甘美ニ
吟行セリソ或ハ題下ノ坊主仁平ハ例ニ村師ノ和名ナリ

辭類

風俗辭 异序

匱部

あるあらうて麻一きぬあらうきり物語と村足辭ともいに
ほとけ書ふおなぐせ二すあれり新しくて物語

の言律ともすらあきらめられやうといふに言の言物
とて通じてはいはゆるの辞類より武帝の秋風と始と
つひて六朝一叶のあそびの中より詩章にて驛とあり
驛章にて辞とあわる驛の事とまづいとての辞の事
へあらわらばく御節のつてあつて物と一そい事
もくとて性をつゝ一あつて治ちよ御のたゞしめん二つ
章にてよう一格あへてはよ五七のはくあらむ叶輪の式と
ふくさとさとくらむるの性とまづはくへばくりゆく
伊豆わらふか一漢の帝れ秋風と詠あつても經と問へ
詠うねを何の格とし乃くさかくくみくと詠うて種姓

トシのれかかの船とてかよ群臣のあらひて種姓の
辞の事とあせらるあつてはやみ章の辭ひとまづの
まづか訓解あれど一辞類をくらむるの辭とほてて
うわよす訓のほてて和と詠うて詠えよす種姓とりて
些二つハ詞ありて和と詠えよす也微情とてやぢや
夷の言句のわからずつてを或ひ古文辭と云ふ辭の情深で
詔辭一と詔の事とまづりてはやみ章のあはま詔
とりかくとくには格のやの風貌とあれとあんじてたま
のたまのあひて辞の事と詔もあまくらむるの辞
とて土作日記かし伊勢あ詔の詞詔ひよか一とてとても

の謡也たゞ
はね言のそや われやせん
ああいこまひ事へとすにほり
も詩賦を行ひた
わざとあらじあらんにほりとやあ
の辞とあらじく人角の詮ちとよわざれいやあ
文有うまうねよはるをもうかふの丘あしは
師仰ひが詞とせり
も駿賀詞の二格めれども
わの風船あらんやとねのまよとけられて山辭と
山下にさり遠くえ年有せめ詞とまうねを近く
む余遠山の辞とましよ

仲殊詞

まことにかくやひきえくさきよのと
かうじかくわくあのはあまくわくわく
はくもくをくの金地絣にと

馬士銅

坡として、此席と云ふ所は、何あれ
か、市井の風情、峰の如き、いわば、
いわゆる、冷然たるもの、もぢまい

犯云此一篇偏ハ辭類ノ註解トリにシ然ニ捷辯ト云附ハ
楚國ノ人ノ詔音ラ字セレ辟言ハ閩東ミベイト云イコニテ
ミイ都ニハサンセ氏アンス氏助詔ハ國々ノ凡俗ナリヒテ序
毛叶辭モ句讀ノ長短ラ調ハナルハ詩賦互行ニテラス
ナ七題ノ外ニ叶格ヲ立テ善ク文體ヲ漏ラサレナリ
去シ領城ノ詞ニワシモヨリモ彼カ平詔ナカラ被ニルト云イカク
歎ニカルト云ヘ例ニ凡雅ニタルナリ次ニ馬士ノ詞ニ錢雲
名ヲ彼カ以俗ニシテ十又二年崔ト云イニナラ開ト云ヘ竹ノ
一字ハ例ノ凡雅ナリ或ハおコシモ無ヤチヌトハサシニナラヌト
云ラ莫ラホツトツメタハ助詔ニソ些ニモ遠賢モニミ知レ

山號辭

一体和尚

キモシ山號をとふもアモカクモキモキモト
キモトウモトツラシムの風アーナシナヘシモアモ
一ト角モツヤルカトカツラシモ自社とニモ代ヒ
一念化生の事すとありて目不眞無可邪ニ一加
ヒテテ時色即足空ニシテニ仰ハアハセハ
あり煩惱あれハ喜提あり佛アハムセアハ
アハムシガリあり御心アツリモトシコレシモトモ
所人向人あがみすある付ハ山號の擔承スカツムヒカ

狂云此經ハ世ニ知ル訥ナカラ例ニ我師ノ論ニ仕セテ空ニ辞ノ
一モラレバフ去レト而審ノ訥ヲ指レテ辭類ト云ニヤラス諷ノ
中ニハ此類卫ニテナラン去レ山姥ノ一冊ハ一体和尚作トカヤ
ゼニ並ウエイ傳テ右今ニナ布有ノ文法ナリト誠ニ忽然
念起ヨリ諸法比向空ノ通ラニキシ魔仰一加ノ理ラ變し
テ邪ハミトリ花ハ紅ト同前ノ境ジ云イニシタルニ色ト云
テ余ハ結前生後ノ傳キアリテ惄人向ト文ラ領えル仙理
ニ通セスニハ一休ニアルニシクニ文学ニ達セスンハ一休ニヤラサラン
況ヤ花ニ体ニ月ニ理レト文章ノ手筋而ニ鼓舞ラヤセル百度
モ附テ感スキ段ナリ但シ訥ラ辞ト人語路ノ長短ニ知ルキ
ナリ

艷詞

卷之三

狂云例のふかくしてうなづく擇ひてうに
かづきむれのうなづくとてはくのうなづく
こげんかくまくとてはくのうなづく
くやめとおもむくうなづくとてはくのうなづく
まくわいとおもむくうなづくとてはくのうなづく
むとむやまとおもむくうなづくとてはくのうなづく
くわくわまとおもむくうなづくとてはくのうなづく
せんとくくわくとてはくのうなづく

狂云此段ハ深年紅葉賀ノ詞ナルラ爰ニ此題ヲ加エ
ハニ藤隆房ノ艷詞ニモテ借り去ハ深年物語
翁翁ノ文章ノ鑑トヤルハ筆ニ縱横ノ神アリテ人情
ラニスニ委曲ナラスト云古又ナレ唐ニテ此段ハ紫上人傳
思ハシ給ヘル六十帖中ノ骨算丁ラソ然一八幼キ人對ニ

テ金所ノ帳ヲ負フニシクハ永ク世ニ在リテ添ハントハ却すラ
スヤセル詞モアラス好色淫妙ノ奉情ナリニ白頭玉タツヨキフ
テ心ナランマト卷モ角モイテ玉リストニ所ニ枕ニ盤石
添年トノ淺深ラモ知ニキナリ誠ニ其名ノ勝在ニ盤石
ヲ以テ押スヤ如ク添年モ立カ子結ヘルハ筆力不思議ノ
艶詞ニシテ此向ニ甚淫ノ情ヲほくレ

獻佛辭

鳥丸芝唐

善福ちれぬひよと一聲もせずテ爾は獨金
の詩像ナリ多田新菴き謫仲の如節ヒシ

ナリノ良病のこれらうつゆかーと南せあふ
仰を十却ひふよふぞんとソムクソムクソ
ひのまくよあうじとてあ美食せ累々浮世ハナシト
ねえやくよくよくは候すうやくよくよく
五々六々あくと青馬山のメモカニケテ是がうれ
ま遠くやあうかこまく
と

孤羊よりとてかくかられ
あくと初和とやくとやくとし
よりと絆詠の猪縁もひくひくと清を往生
とりとくとおれと角あきらめく

狂云北翁ハ元は廣鄉ノ有馬ニ入湯ノ時ノ筆下石トフを
行次ニ書傳テ見角ノ誤モ直ニキヤ然ルニ此ノ偏ノ題名
結文ニ締詔ノニモラクシテ此ニ子ラ以テ題セシカ中間
ノ音ラ詩トクシハモ古文ノ通文、詩ニ似テ前後ニ
序詞ノ文勢アレハ此等ハ僕家ノ詩ト云ハシ但ニ此翁ハ
和音ノ家ナカラ此等ノ字格ニ游ヒ玉ヘル誠ニ文法ノ
説カヨリ虚實ヘ自在トハ称スレ

情捨子詩

芭蕉庵

駿河の國ナリ川のナリナリニシテナリナリナリナリ

あれま、往あう、まやけ川のアリナリナリナリナリナリ
の川ともあやかう、あはくの令トナリナリ
言ふも、さりじわニナリナリナリナリナリナリナリ
りもんあらや、ちわわへと袂ナリ、波打ナリナリナリ
猿とす人、ねよ、ぬの風ひ、

以テナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ
ナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリナリ

狂云北翁モ通文ノ文勢アラ、情捨子ニ秋ノ凡イヤニト
向ケテ如何ニシヤト序詞ニツケタル但ニ詩、聲ノ一体

倭文ニ辞ヲ乞ル時ハ千般法格アレシ誠ヤ富士川ノ瀧ヤ
浮世ノ波ニニイヤケタル此リナラテハ更ニ知ルニシトニ秋カ露
ハ深年ノ奇ラ僧リ父母ノ情愛ハニ莊子カ天性ラ云ル例ニ
和漢ノ博達ニシテ是ラモ漢家ノ辞ヨリ倭文ノ助詔ヲ用得各
ト云ヘシ

タ眞言ノ辭 异篇

東方老坊

むーああ、御おのくと逢ふと、武によ等を行の
ふとおーうらと東いも行へば、あうてけ引とくう
ねあしや、深よばの人とけくよび、けくよみを、御所
ありはれもむーうううううううううううううううう

ア詞トリイほろくと、もうじめ財トリテ、送ふと、やひ
うのを、と、まく、御が、よく、あるや、けり、と、うの、御
うみ、と、財を、ある、の、ある、と、ら、と、か、と、あ、と、じ
う、旅、と、あ、と、人、一、鉢、の、便、と、う、や、と、ユ、高、の、旅、
妻、子、と、か、う、と、宿、の、く、と、家、名、と、わ、と、り、と、せ、
あ、う、て、行、う、旅、と、あ、と、ん、あ、と、と、り、と、あ、い、ら、
の、と、春、秋、も、う、と、い、じ、と、あ、と、と、武、士、の、旅、
り、は、と、け、り、と、今、か、り、ま、む、じ、軍、と、主、せ、と、え、ゆ、
け、と、ゆ、の、今、す、ね、ま、と、よ、す、と、よ、れ、う、と、あ、う、
皆、旅、う、て、旅、と、あ、れ、ま、く、と、ま、に、あ、流、宿、
か、

わやけの下にあづくテ武陵の旅よむじきう
も言つれようむらといぢしふかまにゆくやぢう
あくとくにはゆきふとこ秋よるの月と見
よニよ里のかれぬ人かや望とまゆめ月ルソハカムん
ヤアテ野路の用を命めり歟人あくしやめふあめを
ひくとひてあめアモトわくお花折り内くましりす
よそよ支那の説かトモテ物のむき見るをとづい
も私のに南よきほとあく夙夜よき酸め味とまくア
馬祖を倒の多日まよひのへ一トモトけりのふ
とてゆ年詠うもとやうめんとあはく上よみと

あけてちまくしてヌヨロとおむぬ

御内侍のやせかわの龍へさせとまくかゆせ
せれまくらあみゆのむりりみくらあみてくら
まゆふきとまくわまくわだる。

狂云此辞八十ニ句アリテ鴨立ノ句ハ癡詭ナレハ十二句ニシテ
六韵ナルキニ是ハニ句合セテ一句ノ意ナル故ニ六句ニゾニ韵
ナリ是ラモ叶音ノ一格トウヘンヘシ去レハ其ツ序ハ老子ノ詞ヨリ
守比ハ毛詩ノニ秋ラ搞シテ和ニ仲唐カニキヲ言セ漢ニハ
王維カ詩ヲ合ハス梅子ハ傳灯ノ故古文ニシテ師方ノ中ノ称名
ニヤ總テハ西行ノ榮^{アラク}下リニハアラニ定家承知ノ如白屋ノ伦
クニ

レサラニルキヨリニタ露ノ詞ラ含メテ價俗ノ草木富田旅立
ニ頭ハセル誠ニ文章ノ奇法ト称スレ教シハ此等例ノ辞ニ堅リ
漢文式ラ字リテ別ニ倭文ノ一体ラニタル法ニ私ナキ證文
ナラン但シ序ニ湖東ノトハ丘老井ノ許ニシテ其時ノ多繁行
ノ辞ト題シテ彼ガ文選ノ卷頭ニ置キヌモレト辞ト題セニハ別ニ
筆格モアシカト此辞尙テ論アレハ莫ニ比ヒ扁ラ出セルナリ

鳥遊辭

作者不知名

やんらかに山や千町や一町の多く遡りまつりて初の秋
といひの季節も近づくいの村に山へ山門にかは

佐藤向の山内又音ヨリ山前やら左大将又右大將向
風下すあひ日さぬの多く遡りまつりよす山や
山へ西回りに千町や一町の村ありやハ千町うねる
中の物のうちと山内又山の前代石と木や山へ
おもむ四そぐれへがりて山又山をとふよと山より山まで
山をとむる所のまとすまうりとこかね所のまと
一万半つとも席もある駒馬にけやかれて雄羽子
毛づく雄羽子とひづくとひのとひうあひ引綱
うすありし縄子とひのとひのとひいねとひのとひ
繩のとひのとひのとひのとひのとひのとひのとひ

角弓矢の如ふてさるれ四の矢をもつてすよ
帝より下の徳もとくにのそりとすよ
おう西に夕日とはすむ近とほくで一年うち
望みてまくれ、ナ月山^{トツギ}二月節をの月と一月といふ
て西月の月とち節月と祝す。中畠ひよきとせかす節
うらはらかくやじと仰天のあくとそるものいわゆる

往云北章ハ正月ノ祝詞シテ鳥追ト云者ノ農辰民向々
ラムイアリク啼鳴たり其聲ハ音レ説経者ト云テ達坂
解凡ノ流ラ返テ三井ノ近松院ラ本寺トセリト今危難
ト云者ナラン然ニ此爾ノ古明ナラス昇凡ノ者ノ習ニ傳テ

鳥正馬ノ語ニアラテセニ五フ武儀^{カミ}也^ハ恭慶ヲシボニ
ト向詣セル如クロ接ノ言^{ハシ}イキメラニ志ト於^{ハシ}キノ文玉章
ヲシ思九向シテ定ムキニモ非ス^{ハシ}ニ其^{ハシ}文ラ中畠レ
法格^{ハシ}外ノ凡雅ヲ知レトナリ去ハ五セノ詔路モナラ假名真^{ハシ}
ノ配モナクニ向長短^{ハシ}和子モナキニ絶ニ凡雅ノ情ラ見テ
此等ラ辭ノ文鑑トセハ文玉章ノ家ノ活計ナラサリ去^{ハシ}
此^{ハシ}ノ禁^{ハシ}庭ニモアレハニヤ一廳^{ハシ}所ノ所店^{ハシ}乃^{ハシ}中牧ハ井田
ノ法ラ云^{ハシ}但レハ延吉上ノ傳^{ハシ}朴ニシテ上古ノ作文トハ
久^{ハシ}タリ無^{ハシ}結詔^{ハシ}姓婦ヨリ不意ニ仰法ノニ子^{ハシ}云^{ハシ}
姓婦^{ハシ}門^{ハシ}ノ祝詞ノ仰法ハ彼^{ハシ}嘗詔ナリト^{ハシ}レ

咸類 用居咸

芭蕉庵

あやめをせぬやにじとくのましまよひうらく
くまやかト人よきよひとあかくいふらく
すれりゆのあらみのあくさくをのむてわれ
まくらやねどりまくらゆのくらひ
かづら庵のきだあまくわきとあくよづらをと
てよとたよまとくわくわくらのくらや
ゆめくらつゝくらゆくまくらのくら

任云此題ハ大学子ノ辞ラ借テ局ハ開ち少人ノ独处ナリ

ト朱氏カ註毛ニアリトワ去レハ此篇ハ陰有ノ常情ニシテ
或時ハ世ヲ疎トニ或々ハ人ラ懷レム卒ヨリ心神不定ナヨ
ハ頓阿モ凡メノ情ニ過タリトニ嘉好法師ノ咸文ル伊
誠ニヒ篇ハ前後ニ嘉羽字ラ用イテ自己ノ散乱ラ咸
首尾ノ文法ラクニキナ但レ此句ハ幼子ノ聲句トモ云フ
キヤト故云明モ詣リ玉アリトワ常ニ其仰ヘサヌラムアリ

獨處咸

芭蕉辭

猶しくもうとすこの言せ懷をくらまぬほのか言
うますかよもやかれて今ト帰のねまくあらまふよ

対猪の腰もあきらめず男猪と云ひ和牛も
そのをかねてすりあわちもむち有るの腰が、
まことにあらそく口どけにやわらかく、うるさ
うれしきも耳も野茅猪のうらわやうは、
ほてて今やうの種が掛つてもうらわやうは、
のをよがく猪のひかねあうて、うれしき
えうしきして、まくはれすとよやある。
ほんとうきぬあらそくの方は、うりて用が種の、
スを單に、やいせ種猪とあうて單筒の
体のすみほにふすむ例がよくあるもの

りあとらひまきしられと有様のきよやつて猪
一頭もこういやうてくへを二世もととかうさんと
いり、とひて猪もとにもうらんとねもくゆと
もうにけうかとあやひんときくと猪もくゆ
くうじきをとくわくのくをくうわくよ、
あくしよ

和云北國ハ自利利他ニシテ詞ヲ言ニ演雅ナリ
ハ源氏ノ風流ヨリ枕草絆ノ寓言ラ合ロ或ハ徒然草
古詔ラ借テ稻若ノシノロニテラ抹レル孤ト猪トノ交ヘリ
ラ云イテ又云乎ノ徒名ヲ童子タル文筆トノ自在ハ
此向ニ見ニシケンラれ乎ノ詔三リ人色歌ノ猪ヨリ

毛淺筒數ハ遠ク或テ近ク慎サコヤ然リ色云遊ヘクテ
色濃フカラストハ角雖ノ高モ北支也レ但し色靜ヘ田
氏ニシテ尾ノ城下ニ假居ス素生ハ濃ノ竹^カ龜ノ互生ナリ
トワ

南重文

渡辺口